2014/01/27
佐野（http://cst-sano.com/）
＊無断での複製・公開・配布等を禁ず

明治大学文学部一般入試対策（初稿）

この資料は、明治大学文学部を受験する担当生徒の、直前期の確認のために作成したものであり、また、この資料の内容を踏まえてさらに指導を加えることを前提に作ったものです。そのため、内容の不足が多分にあり、また、推敲など一切行っていないため、誤字脱字、読み辛い文章、理解しにくい言い回しなどもあるかと思われます。ご注意ください。

なお、無断での転載等は禁じます。

1. 全体を通じて

1.1. 傾向

・試験時間：毎年 60 分

・構成：近年において 2007-2009 年度まではⅠ,Ⅱの文法・イディオム問題、Ⅲ,Ⅳの長文問題で大問４つの構成となっていたが、2010 年度から新たに設問Ⅴが設けられている（なお、2006 年度までは現在とほぼ同様の構成）。今年度も同様の構成となるだろう。

1.2. 対策

問題数、長文の長さに対し、時間に余裕があるとまでは言えないので、**文法・イディオム問題、長文問題共に、分からない問題で時間を無駄に食わないよう心がける必要がある。**逆に、それが徹底できれば時間が足りないという事態にはならないだろう。

1.2.1. 直前の対策について：

基本的に新しいものに手を出す必要はない。過去問の復習を中心に、気になるところだけ他の教材で補完するようにするとよいだろう。なお、**過去問の復習**の際には、形式に慣れることに主眼を置いて解き直しつつ、**本番を意識して時間配分を気にしながらやることが重要**である。

1.2.2. 時間配分について：

大問１，２にそれぞれ 10 分、大問３，４にそれぞれ 20 分、大問５に 10 分とすれば、ちょうど 60 分となる。見直しなどの時間を考慮すれば、**大問１で５分、大問２で 10 分、大問３で 20 分、大問４で 15 分、大問５で 10 分としておけばよいだろう（10 分余り）**。他に自分が解きやすい（得点が取りやすい）時間配分があれば、この通りでなくても構わない。

2. 〔Ⅰ〕

2.1.傾向

毎年穴埋め（記述）。ただし、年度によって形式が違うので注意。

・2013 年度：言い換え文の穴埋め。いずれも基本的な文法問題
・2012 年度：普通の穴埋め。一問は文法問題、他の二問はイディオム問題
・2011 年度：普通の穴埋め。いずれもイディオム問題
・2010 年度：言い換え文の穴埋め。いずれもイディオム問題
・2009 年度：同綴異義語の穴埋め問題
・2008 年度：同綴異義語の穴埋め問題
・2007 年度：同綴異義語の穴埋め問題
・2006 年度：同綴異義語の穴埋め問題

2.2. 対策

2010-2013 年度の問題では、文法、イディオム問題共に基本的なものがほとんどなので、センター試験の問題と他の問題集をざっと見直しておけば、そこから出る可能性が高い。

ただし、そろそろ**同綴異義語の穴埋め問題（「同じ綴りの語を入れなさい」）がまた出題される可能性がある**ので、そちらも対策をしておいた方がいい。

2.2.1. 同綴異義語の穴埋め問題について

大学受験に限らず、英語の試験の問題ではあまり見かけないタイプである。故に、頻出事項を示すこともできない。ただ、３つの意味合いを持つ同綴異義語が毎年聞かれているが、高校生に期待する単語ストックにそのような単語は多く含まれてはいないだろうから、単語帳で単語を確認する際に多義語等に気を付けると共に、過去問を確認しておけば十分だろう。

解き方については、「**意味合いや文の構造が把握しやすい（＝単語を入れやすい）問題を中心（起点）にして、他の文にも入り得る単語を考える**」ということになるだろう。ちなみに、起点にできるもの文が多ければ多いほど正解を思いつく可能性が高くなるので、文が３つあれば形式的には易しい部類に入る。

例 1

a. I think there is an age limit, but I'd have to (　　).
b. You must (　　) out of the hotel by 10 a.m.
c. He is wearing his favorite (　　) jacket with a striped shirt.　（2009）

解説

一番分かりやすいのは b だろう。「あなたは 10 時までにホテルの〇〇アウトをしなければならない」。当然、「チェック」アウトである。このように予想を立てたら、他の選択肢に当たってみればよい。c は「チェックのジャケット」という意味になるだろうし、a は「確認する」必要があるという内容になるだろう。

例２

・If we all (　　) our money, I'm sure we will have enough to buy her present.
・There was a (　　) of oil under the car.
・During summer, many people swim and the (　　) is crowded.　（明治 2006）

解説

文の内容自体はどれも取りやすいが、単語を入れやすいのは３つ目だろう。夏に人々が泳ぎに行く場所は普通、海かプールである。海だとすると、２つ目が「オイルの海」になる時点で違和感があるが、１つ目でお金をどうするのかが意味不明になる。プールであれば、２つ目は「オイルのプール」となり、海よりはまし。１つ目は「お金をプール」するとなり、意味が成り立つのでプールが正解。

以上のように、**この形式では基本的な単語が問われる**。なので、**同綴異義語を知らない単語でも一つは空欄を埋められる可能性が高い**。繰り返しになるが、とにかく一つ埋めてみて、それから他の選択肢を検討すること。また、二つ埋まれば、残りの一つの正誤が判断できなくても正解である可能性が高いので、あまり時間をかけ過ぎないこと。

3. 〔Ⅱ〕

3.1. 傾向

2013 年度までいずれも単語の語形・品詞変化（2008 年度を除く）

（2005 年度までは、同綴異義語の穴埋め問題とセットで大問 1 の括り）

割合は、およそ文法問題と品詞問題が半々

3.2. 対策

3.2.1. 文法問題

問題の性質上、分詞構文・仮定法・関係詞・分詞修飾・受動態などの基本的な文法知識を問うものが多く、出される文法の種類も限られているので、過去問を見返したら、同様の文法知識を問うセンター試験の問題や他の問題集の問題を見返しておくだけでいいだろう。ただし、分詞修飾と分詞構文は若干、問題の形式と合わさって分かり辛いものも出ているので、その単元は注意して確認すること。

3.2.2. 品詞問題

基本的な単語の品詞変化を問うものが多い。過去問を見返した後に、他の問題集で補完するとよいだろう。解き方については、「①**特殊な文法を使っていないことを確認**した後に、②その単語の**品詞が何か**を判別し、そして、③そこに**どの品詞が入らなければいけないか**を判断する」という流れになる。

なお、品詞を**動詞から名詞に変えなければならない問題**が毎年出ているが、**名詞形がある単語**についてはほとんどの問題で、**正解は動名詞ではなく名詞形（動詞の目的語を除く）**になっている。**動名詞が答えになる問題**は、2004-2013 の間で**1 問しか出ていない（動詞の目的語を除く）**ので、**まずは名詞形があると疑った方がいい**。

例 1

The common cold, which is the most widespread of diseases, continues to plague humanity despite the effort of doctors to achieve its (prevent) and care. (2013)

解説

まずは本文の内容をあまり気にせずに、答えを考える（文法問題の場合も同様）。そうすると、**prevent の前に its「その」（所有格）が来ているので、prevent（動詞）を名詞にしなければならないことが分かる**。上で説明した通り、動詞を名詞に変化させる問題では、ほぼ答えは動名詞ではなく名詞形になる。

さて、答えが名詞形になるであろうことまでは分かっても、肝心のその**名詞形が分からないという場合**もあるだろう。そういった場合には、**まず-ion をつけてみて**、おかしくないかを検討するとよい。というのも、動詞に-ion をつけた形が名詞形になる単語が英語には多いからである（違和感があれば**次に-ment や-ity、-al などを試す**）。

というわけで、**prevent に-ion をつけてみると、prevention となる**。特におかしくない。そして、正解である。なお、この問題以外にも、**admit→admission(2013)、addict→addiction, converse → conversation(2011) 、 transport → transportation(2009) 、 conclude → conclusion(2007)…**など同様の問題が出題されている。ただ、これらを見れば分かるように、**単純に-ion を付ければいい場合がある一方、t を s に変えて-ion を付けたり、-ation を付けたりする場合もある**。その辺りは**同様に-ion を付ければ名詞形になる単語を思い浮かべて比較検討**すること。なお、**当然のことだが、上記と違う形が名詞になる単語もある**ので、この知識だけに頼らずに、しっかりと問題集などで頻出単語を確認しておく必要がある。

例 2

If you want this job, you must possess the technical skills (require) to operate the machinery. （2009）

解説

「この仕事が欲しいなら、（その）技術的なスキルを持つ必要がある」で話は成り立つ。つまり、**require からはオマケ部分＝修飾部分**である。「その機械を操作するのに『要求される』～」という**動詞句**で(the technical) skills を**修飾する**形なので、分詞修飾を使う。

例 3

Soon, robots (put) parts together in car factories will be able to follow voice commands. （2006）

解説

一見して分かり辛い文は、主語/動詞/その他 で文を分けてみるとよい（長文を読む際も同様）。そうすると、この文は(Soon,) robots (put) parts together in car factories / will be able to follow / voice commands.と分けられる。そして、**robots will be able to …で話は成り立つわけであるから、put 以下はオマケ部分であり、robots を修飾する部分**である。動詞句で名詞を修飾しているので**現在分詞か過去分詞**を使うことになるが、**どちらの分詞を使うかで悩んだ際は**、分詞修飾にせよ、分詞構文にせよ、動詞＋A＋Bにせよ、**その動作をする側かされる側かで判断すれば間違いない**。この問題では、「共に部分を占める」ロボットという意味合いだと予想できれば、**ロボットは「占める側」なので現在分詞**を使うと判断できるだろう（このように意味合いを理解できなかったとしても、take part in などを連想できれば解ける）。

例 4

Alaska, (purchase) from Russia in 1867, became the 49th state of the United States in 1959.　（2006）

解説

文の間に動詞句などが挿入されている場合（挿入句）、それはオマケ部分である（長文でも同様）。実際、Alaska became the 49th states…で文は成り立つ。これが分かれば、後は上記の問題と同様に解けばよい。**Alaska は買われる側**、よって過去分詞を使う。

4. 〔Ⅲ〕〔Ⅳ〕

4.1. 傾向

毎年２～３ページの長文問題である。長文の内容は簡単だと言われているが実際のところは、**流れは掴みやすいが細かい部分を気にすると読み進められない文であることが多い。**また、ⅢⅣを含め問題数がセンター試験などと比べれば少ないので、少しは時間があると考えてよいが、やはり全文をじっくり読もうとすると時間が足りなくなるだろう。

4.2. 対策

問題自体は簡単なものが多いので、**本文から何が読み取れなければいけないのかを理解した上で、必要な箇所を必要なだけ読む**という（長文問題を解く際の基本的な）姿勢を徹底することが重要である。

また、本文を読まなくても解ける、或いは選択肢を複数切れる問題が多い。特に昨年に至っては半分は読まずに解ける。**本文を読むと、あり得ない選択肢もありなように見えてくる**ものである。しかし、**そのような選択肢は**（個人の知識・技量にもよるが）基本的に**やはり間違い**なのである。なので、そういった選択肢に引っかからないためにも、**本文を読む前に答えが選べる問題は解いてしまい、また、選択肢を切れる問題は選択肢を切ってしまうこと**。そして、そうした問題は**本文中に絶対的な根拠がない限り変えない**こと。

あとは、センター試験対策などで身につけて文章問題を解くスキルを活用すれば大半の問題は解けるだろう。繰り返しになるが、問題自体は決して難しくない。自信を持って、今まで身に付けたスキルを総動員して望めば解ける。とりわけ長文問題で必須となるのは、そのような、**余裕を持って文を眺める姿勢**である（国語も同様）。所詮、同じ人間が書いた、入試で使えるような一般的な内容の文である。大したことはないのである。

問題のタイプごとの解き方や本文の読み方は別途、過去問を使って説明を加えるが、基本的な姿勢は、以下の通りである。

①本文は、本文を読むために読むのではなく、問題を解くために読むもの。

→故に、**問題を解くのに必要ない部分は流れだけ分かればいい**

ポイント：必要ない部分は頭から単語単語に目を移していく。

問題を解く上で必要ない部分を、いちいち一文ずつ訳さない。

②例示部分はメインの話ではない。

→例示とは、**主張の補完のために行うものに過ぎず、主張そのものではない。**

要約を問うものなどではこの点を意識すること。

③例示などは問題を解く上で必要なければ読まなくてもよい。

→**必要であれば戻って読めばよいだけ**である。

例示に限らず、不要だと思う部分は積極的に飛ばす。

例）問題に関係ない部分で、その先の内容が予想できる場合

④修飾部分はオマケ部分

→文が理解しにくい場合は、オマケ部分と本体部分を別々に理解する。

⑤筆者の立場＜肯定・否定＞を意識する。

→これは本文の内容を把握する上でも、問題を解く上でも重要である。

筆者が肯定的に捉えているものについて否定的に書いている選択肢は×

⑥接続詞に注意する

→よく言われることだがやはり重要である。

特に、逆接の接続詞には注意。逆接の接続詞の後には筆者の主張が置かれる場合が多いという点も重要だが、逆接の接続詞に挟まれた前後の文の内容は、一方が分かれば他方も分かるので、文章読解の点でも重要なのである。（「ＡしかしＢ」→Ａが分かればＢはその反対だろうし、Ｂが分かればＡはその反対になるはず。）

よくよく検討すれば、以上①～⑥は当たり前のことを言っているものばかりだと分かるだろう。しかし、それが出来ない生徒が今も昔（といっても私が受験生だった頃）も多いのである。と言うのも、このようなことを教わる機会がほとんどの学生にはないため、自分で気付ける一部の早熟な人間を除いては、知る術もないのである。

しかし、このような当たり前のことができるか否かが、試験では点数の形ではっきり表れる。そういった意味で、今このレジュメを読んでいる生徒は有利なのであるから、甘んじず最後まで努力を続け、そして試験当日は自信を持って試験に臨むこと。

5.　〔V〕

5.1. 傾向

「1. 全体を通じて」でも触れたが、ここ３年間は問５が設けられており、この構成自体は今年も変わらないと思われる（多くの問題を解かせるのが流行りだから）。ただし、ここ３年は出題されている問題の形式が違うので注意が必要である。

・2013：英文並び替え
・2012：短い対話文の空欄補充（文）　―センター試験大問２のＢと同様の形式
・2011：図を含んだ英文問題　―センター試験大問４のＡに近い形式
・2010：なし
・2009：なし
・2008：なし
・2007：英文並び替え（配置はⅢ）
・2006：英文並び替え
・2005：英文空欄補充（語）（配置はⅣ）
・2004：英文空欄補充（語）（配置はⅣ）
・2003：なし
・2002：なし

5.2. 対策

以上のような軌跡を見ると、英文の並び替えか空欄補充が来るように個人的には思えるが、根拠と言えるほどのものはない。あるいは、また大問Ｖがなくなる期間に入るのかもしれない。ただ、やはり何かしらが出題されると考えて対策をしておいた方が有利である。

2012,2011 年度の問題形式については、センター対策でやっているので、さっと解き方を見直しておけば事足りる。

また、空欄補充（語）については、他の私立大学でもよく見られる出題形式であり、内容も基本的な文法・イディオムの知識があれば解ける問題なので、Ｉの文法問題などの対策と一緒に、センター試験の問題や既に解いてある他大学の問題などを見返すことで対策をしておくとよいだろう。

問題は英文並び替えであるが、手順さえ分かればさほど難しくない。

①最初、或いは最後にくる文を確定させる。

→具体的な判断方法

まず、最初・最後にこない文を切っていく際の方法

→この方向の方が楽で且つ確実なので、まずはあり得ないものを切っていくこと

・「<u>逆接の接続詞から始まる文は先頭にならない</u>」
・「<u>追加の情報を与える文は先頭にならない</u>（In addition, ...など）」

・「another など、対の例が先にあることが前提である文は先頭にならない」
・「逆接の接続詞から始まる文は最後にもならない」

先頭にくる文を選ぶ方法
・「具体的ではない文」の可能性が高い。
　→最初の文では簡潔に話題を振ったり、主張を述べたりするものだから
　　→「あまりに具体的な文は先頭にはならない可能性が高い」

②選択肢の順序を活用しながら順番を確定させる。
　→例え①で最初や最後にくる文を確定させられなかったとしても問題ない。①の過程であり得ない選択肢をいくつか切れるだろうから、あとは残った選択肢の中から自然なものを選べばいいのである。
　また、この段階では無闇に時間をかけたり悩んだりしないためにも、選択肢を「活用」することが大事である。例えば、「残った選択肢で順序がみな同じ箇所は検討する必要がない。」当たり前と言えば当たり前だが、案外そのことに気付かず、選択肢を一つ一つ検討している生徒が多い。そして検討する必要があるのは、「残った選択肢で順序が違う部分」になるわけだが、「確定している順序の文の直前直後に入る文」を検討すれば労力が小さくて済むように思われる。ただ、この辺りは問題次第である。残った選択肢を活用するということを意識すれば、どのようなパターンでも解けるだろう。

例
イ：For example, on-campus housing is generally more convenient than off-campus housing. …
ロ：Cafeteria food is another disadvantage of on-campus housing. …
ハ：The decision to live on or off campus is very important one.
ニ：Both situation have advantages and disadvantages and which one you choose depends a lot on what is important.
ホ：On the other hand, in a dormitory, you usually have to share a room, while off-campus housing can be more private and less noisy.

A. ニ―ハ―ホ―ロ―イ　B. ハ―ニ―イ―ホ―ロ　C. ホ―ロ―ハ―ニ―イ
D. ハ―ニ―ロ―イ―ホ　E. ロ―イ―ニ―ハ―ホ　(2013)

解説
　まず、最初・最後にこない文を切っていく。**イは例示の文なので最初には来ない**。なぜなら、長文読解の説明でも話したことだが、例示はある考え・主張を補足するためになされるものなので、先にその考え・主張がなければおかしいのである。**ロは another が使われて**

いるので先頭には来ない。「他の」という話をするためには何かその前に話が出ていなければならないからである。ニとホは先頭に来るには内容が具体的過ぎるし、先頭に置くには唐突すぎる。よって、先頭にくるのはハしかあり得ない。この時点で残る選択肢は、B. ハ―ニ―イ―ホ―ロ と、D. ハ―ニ―ロ―イ―ホ だけになる。そして、英文に当たらなくても、ハに続く文がニであることが確定する。また、イ―ホの繋がりも確定である。この問題では、ここからニ→イが妥当かニ→ロが妥当かを見るとよい。ロは先ほど見たように another が使われているが another disadvantage というために必要な disadvantage の先例がハ―ニの文では挙げられていないのでニ→ロはない。よって、Bが正解となる。

問題によっては、ホ→ロとロ→イのどちらが妥当かという点から攻めた方がよい場合などもあるだろう。その辺りは選択肢を活用し、さらにその中から効率のよい攻め方を選ぶことを意識して問題に当たること。

なお、上記の問題は一部文を省略してあるが、正解を選ぶのに不足はないはずである。これが、「必要のない部分は気にしない」ということの具体例である。実際の問題の文と一度見比べてみるとそのことがよく分かるだろう。